



## パネルディスカッション

### テーマ 「平泉研究 ―平成から令和へ、課題と展望―」

- ・コーディネーター 佐藤 嘉広氏（岩手県文化スポーツ部文化振興課世界遺産課長）  
菅野 文夫氏（岩手大学平泉文化研究センター副センター長）
- ・パネリスト 杉本 宏氏（京都造形芸術大学教授）  
吉田 敏氏（山形県立米沢女子短期大学教授）  
渡辺 健哉氏（大阪市立大学准教授）  
北村 忠昭氏（公財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター文化財専門員）  
鎌田 勉氏（前岩手県教育委員会生涯学習文化財課文化財課長）

#### ●自己紹介

#### ●パネルディスカッション

##### テーマ1 「“平泉”の発掘調査の成果を振り返る」

- (1) 昭和～平成初期の発掘調査の思い出と平泉との関わりについて
- (2) 平成30年間の平泉遺跡群の発掘調査の成果について振り返る。

##### テーマ2 「世界遺産による新たな平泉の発見」

- (1) 「平泉」が世界遺産登録された経緯について
- (2) 世界遺産登録によって拓かれた研究の視点について

##### テーマ3 「世界へ発信すべき平泉」

今後、研究の進展に期待する点や、今後の調査計画や展望、そして「平泉」を世界へ発信していきたいことについて

〈菅野〉 ただいまより第3部のパネルディスカッションに入りたいと思います。進行はわたくし、岩手大学平泉文化センターの菅野と、岩手県文化振興課世界遺産課長の佐藤嘉広さんで担当させていただきます。ディスカッションのポイントは、テーマ1ということで「平泉の発掘調査の成果」を振り返り、テーマ2が「世界遺産による新たな平泉の発見」、テーマ3が「世界へ発信すべき平泉」。この三つのポイント、キーワードでここにいらっしゃる先生方にご議論いただきたいと思います。なお、会場の皆さんからも色々と非常に興味深いご質問をいただきました。なるべくご質問等も盛り込んでのパネルディスカッションにしたいとは思いますが、すべてを尽くせないことについては何卒お許しください。では最初に、ディスカッションに入る前に改めて、今日ご報告になった先生方、さらにパネリストの方々も若干増えましたので、それぞれ自己紹介と申しますか、ご自身がそもそもどういうご研究をなさっていたか、また平泉の研究に関わられたきっかけなどを、簡単にお話下さい。



## 【自己紹介】

〈杉本〉 京都造形芸術大学の杉本と申します。歴史遺産学科で教えているんですが、3年前までは宇治市で文化財の専門職員を33年間やっておりました。平泉との出会いは、平成元年から平等院の調査をして、復元整備をするというプロジェクトが始まりまして、平成元年に試掘をしたら、綺麗な洲浜が出てくるわけですね。洲浜っていうのは小石がバラバラ撒いてあるだけで、なかなか発掘調査しづらいし、京都でもそんな良い洲浜が発掘されてこなかったのが、どういう調査をしたらいいのかなあということに迷っていたら、当時、調査委員をやっておられた牛川先生が、ちょうど今、毛越寺を掘ってるから君見に行きなさい、ということで来させていただいたのが、平泉との最初の出会いです。その時は東北新幹線がまだ東京駅じゃなくて上野から出ておりまして、上野から乗ってこっちにやってきたことを覚えています。先ほど申しました通り、平等院の調査も大変長かったので、年に1、2回は平泉を訪れていますので、通算で40~50回くらいはこちらの方にはお邪魔しております。

〈吉田〉 山形県の米沢女子短大の吉田と申します。私ももともと古代の都をやっておったんですが、先ほど申し上げた通り、平泉文化フォーラム第1回目から関わらせていただきまして、20年経ちまして、できればこれで卒業させて欲しいなと思っておりますが、そうもいかないかもしれませんけども、そんなことで勉強させていただいております。よろしくお願いたします。

〈渡辺〉 大阪市立大学の渡辺健哉です。今、報告させていただいた通りですが、私の研究は二つテーマがあります。一つは、今日お話をした遼と金とその次の元の時代の北京の歴史の研究をしています。それともう一つは、明治、大正、昭和にかけての日本と中国の学术交流史を研究していたということもあって、平泉の東アジアの位置付けについて研究をして、次いで藤島亥治郎先生の研究をしました。平泉との関わりは、僕は生まれが仙台だったものですから、中学校の遠足でジャージを着て、中尊寺を登ったのが思い出です。研究に関しては2015年度の共同研究員として、藤原崇人（現在、龍谷大学）さんと一緒に資料集の編纂に当たってから、15年度、16年度、17年度、18年度と来て、そして19年度ということで、まさか自分が子供の頃に遠足で行ったところの研究をすると思いませんでした。そういった形で研究を続けさせていただいております。

〈北村〉 午前中に発表しました岩手県埋蔵文化財センターの北村と申します。私はこれまで、埋蔵文化財センターで発掘調査を主に担当してまして、今年度から柳之御所遺跡の調査事務所に来て、柳之御所の発掘調査に携わるようになりました。神奈川県出身で、大学の調査を北海道で行った時の帰りに青春18切符で、平泉の駅に降りて平泉の駅前で野宿したというのが岩手に来たときの最初の経験です。岩手で最初に訪れた平泉に、20年経って調査を担当することになり、フォーラムで発表をさせて頂くことになり、不思議な縁を感じております。よろしくお願いたします。

〈鎌田〉 4月に再任用職員となりまして、県の教育委員会に採用されました。現在、埋蔵文化財保護の仕事をやっております鎌田と申します。ここで初めて登場した人間です。現役時代は、教員から始まって、埋蔵文化財センター、県立博物館、あと県教委と9年くらいずつ色々と仕事をして、発掘調査とか、あるいは柳之御所と平泉関係の展示、あるいは文化財保護行政等の仕事に従事してきました。平泉との関わりという点では、埋蔵文化財センターに来て、初めての遺跡が柳之御所遺跡の緊急発掘調査、平成4年、今から27年以上前になりま



すが、これを機会に平泉との関わり、特に出土品の中で瓦というのがありまして、柳之御所、あるいは中尊寺で出てくる瓦の研究をずっとしつこくやっているというようなところなんです。そのあと何年かして、紫波町の山屋館経塚という12世紀の経塚遺跡の調査をたまたまやることになりまして、やはり奥州藤原氏の関係で、この経塚の勉強もするようになったわけです。久しぶりに試掘調査で県内回ってるんですが、一昨日から無量光院の工事立ち会いに来ておりまして、東稲山の景色を見ながら、懐かしく思っていたところです。

〈菅野〉 はい。ありがとうございます。それでは早速、本題に入りたいと思います。テーマ1に関しては進行を佐藤さんにお渡しします。

### 【テーマ1 平泉の発掘調査の成果を振り返る】

〈佐藤〉 岩手県文化スポーツ部の佐藤といいます。どうぞよろしくお願いいたします。先ほど菅野先生の方でも、ご紹介いただきましたように三つのテーマで討論を行って参りたいと思います。まずテーマ1としまして「平泉の発掘調査の成果を振り返る」というところから、5人の先生方にお話いただきたいというふうに思っています。まず会場のご参加の皆様からいただいた質問がございますので、ちょっとご紹介をさせていただきながら、それぞれの中でお答えいただければ、というふうに思うんですが、まず柳之御所の関係で幾つかご質問をいただいております。「橋が幾つか見つかるようなんですが、どこに、どのようにあるのか」というようなご質問と、それから「道路がどうして作り変えられたのか」、というご質問です。それからもう1点は、堀の内部と堀の外部の関係というのはどういうものか、というご質問をいただいておりますので、この3点を踏まえながら、「ここ10年あまりの柳之御所遺跡の成果」について、もう一度ご説明いただければと思います。よろしくお願いいたします。



〈北村〉 宿題をいただいたようなので、そちらをお答えしながら、進めていきたいと思います。まず橋についてですが、柳之御所遺跡で確認されている橋は、午前中の報告の中でもお話した4つあります。資料の12頁の図（※本年報ではフォーラム時の説明資料は不掲載）をご覧ください。堀内部地区の図ですけども、図の下のほうに76次・77次とあると思いますが、その右側に南に向かう橋があります。その北側の内側の堀が南北方向にあります。内側の堀に架かる東に向かう橋があります。外側の堀跡の東側は、地形的に落ち込んでおりまして、堀跡の続きが確認できない状況にあります。柳之御所遺跡の南東側には内側の堀跡に2つの橋跡があります。それと、午前中にもお話ししましたが、75次のところに、橋状の渡る施設があります。また、同じ図の左上に79次とありますが、土橋があります。この他に、79次の下に74次とあると思いますが、この部分で、橋とは断定できないんですけども、内側の堀跡に柱の痕跡が見つかりまして、橋の可能性がある場所が一つ見つかりました。それと、74次と書いてあるところから、斜めに細長くなっているところがあるのですが、そこにさらに古い段階の堀跡がありまして、そこにも土橋があります。あともう一つ、真ん中のところに池があるのですが、池にも橋が架かっておりますので、橋もしくは橋状の施設というのを含めると、全部で7ヶ所あることとなります。外側の堀跡に関しては、79次で見つかった土橋があるのですが、内側の堀跡に関しては、中尊寺金色堂方向、無量光院の方向に向かう往来施設、要は橋とか土橋というものが見つかった

ていないというのが大きな課題としてあります。それと、道路についてです。昨年度の調査で二時期あることが分かりました。なぜ道路を作りかえる必要があったのかわからない状況です。今後も発掘をできるかという問題はあろうと思うのですが、道路跡の続きを探していき、この課題が解明できるようにしたいと考えています。

そして、堀内部地区と堀外部地区の関係ですが、堀内部地区が政庁、役所的なものだということが分かってきています。堀外部地区については、はっきりとしたことはわかっていません。これまでも断続的に発掘調査を行っていますが、堀外部地区の様相、堀内部地区との関係を解明する上でも、今後も調査をしていく予定です。堀外部地区には、堀内部地区と中尊寺金色堂を結ぶと考えられる道路があるということは調査結果としてありますので、堀外部地区には、堀内部地区と関連する何かしらの施設があると思います。見つかることを期待して、今後の調査を行いたいと思います。

〈佐藤〉 ありがとうございます。午前中の報告と合わせまして、特にこの10年で特筆すべき事項ですとか、柳之御所の遺構ですとか、遺物ですとか、何かもう少し補足等あればお願いします。

〈北村〉 遺構に関しては、午前中でもお話しましたけれども、成果として次の3点になるかと思えます。一つは、寺院関係の中尊寺金色堂や無量光院と結ぶ土橋などの往来施設が見つかったこと。二つ目に、中尊寺金色堂へ向かう道路跡が見つかって、時間差があること。そして最後に、第10回で報告した時に指摘はされていましたが、この10年間の調査成果によって、内側の堀跡と外側の堀跡に時間差があり、外側の堀跡が古く、内側の堀跡が新しいということがわかった、ということが挙げられるかと思えます。それと、遺物に関しては、特異な遺物にはなるかと思えますけども、「鳥獣人物戯画」に描かれているような擬人化されたカエルの絵が書かれた折敷片が見つかって、京都と結びつきのある文化があったということが挙げられますし、「題箋軸（だいせんじく）」と言って、今の日記という形で柳之御所の機能を説明できるような遺物が見ついているということが大きいかと思えます。



〈佐藤〉 ありがとうございます。柳之御所遺跡は毎年度1000㎡ぐらいずつ調査を進めており、成果というのが単年度で見ると、それなりなんですけど、やっぱり10年積み重ねると、一気にいろんなことが分かってくるというようなお話をいただいたのかなというふうに思います。続きまして、ご質問いただいております。「長者ヶ原廃寺跡について分かっている部分について教えて欲しい」というご質問なのですが、発掘調査につきましては柳之御所遺跡だけではなくて、平泉町内あるいは衣川の流域、それから太田川の南、さらにちょっと離れたところで、いろんな平泉文化の関連、特に北上川流域の日詰などでも最近では色々出ているところですが、この10年で平泉遺跡群でどういう調査や、特に注目すべきものというようなことで、先ほどの長者ヶ原廃寺跡の分かっている部分も含めまして、鎌田さんの方からお話しいただければと思います。

〈鎌田〉 私が個人的に成果だと思っていることをお話したいと思います。まず一つは志羅山遺跡、泉屋遺跡です。平泉駅から毛越寺に向かう毛越寺街路があるんですが、街路の関連の発掘調査で埋文センター、町、教育委員会が調査したことで、かなりこの道路状遺構や区画溝という東西大路を中心とした町の区画が分かってきました、しかも杉本先生のお話にもありましたように基衡の区画、秀衡の区画という二つの区画がありそうだということが、平泉の街作りの様子から分かって来たということ

です。次に花立遺跡の調査です。花立廃寺という平泉文化遺産センターから、さらに南の方に行く一帯が花立遺跡というんですが、この遺跡の調査で瓦が大量に出て、私も瓦が好きなので、非常に関心を持ったんですが、これが何と法勝寺、杉本先生のお話にもあった通り、後白河天皇が造った御願寺で、この法勝寺にかなり技術的に近い、おそらく瓦の工人さんがやってきて、作ったのだらうと思うのですが、そういう法勝寺系の瓦から花立廃寺のあたりに12世紀の初め頃のお寺跡があったと考えられます。あと三つ目ですが、無量光院跡の調査が進みまして、無量光院の内容が分かってきたという大きな成果と、さらに無量光院の前進施設、この無量光院がおそらく秀衡がある程度晩年を迎えた時期に造ったということは推測されていたわけですが、その前に何があったのかということが、少しずつ無量光院の整備に係る発掘調査で分かってきました。今後の課題ではあるわけですが、関連しまして無量光院の近くにあります「伽羅の御所跡」という遺跡、秀衡らの常の居所とも言われている場所なのですが、毛越寺街路に共同の大きなパイプを入れる共同溝の工事に伴う発掘調査で「伽羅の御所」関連の、「伽羅の御所」ですかね、堀とか建物跡が出てきたということです。あとは中尊寺の「伝大池跡」という池跡があります。ここの調査がやはり進んでまして、2時期があり、それぞれ清衡期、秀衡期というのが二つあって、この状況が少しずつ解明されつつあります。こういう中で、平泉全体の居館の様子、神社、お寺の様子、町の人々の生活の様子、あるいは志羅山遺跡の中では銅の鑄造工房等も見つかっていますので、そういう工房等の平泉の全体像が少しずつ明らかになってきたことで、全体的な姿が明らかになりつつあるということです。

長者ヶ原廃寺の話ですが、特殊な礎石の建物の構造をしていまして、ひょっとすると古代から中世に繋がるお寺の構造を持っているのではないかという、解釈です。この孫庇（まごひさし）的なものは、礼拝をする施設というものが礎石の中に含まれているのではないかということで、類例等を検討してからさらに、長者ヶ原廃寺の特殊性、特徴というものを明らかにしていければいいのではないか、というふうに考えています。

〈佐藤〉 ありがとうございます。北上川の中流域、上流域の話をもう少し、つけ加えていただくことができますか。

〈鎌田〉 私も山屋館経塚という遺跡の調査をしましたが、やはり北上川流域に経塚遺跡が非常に多い。これは全国的に見ても、経塚が非常に集中している場所というふうに言うことができるわけですし、あとはここの仏像です。12世紀の仏像というものの見直しがされていまして、近年ですと、一関市の大東町渋民の東川（とうせん）院の仏像が昨年重要文化財になったんですが、この仏像というのが、金色堂の仏像と非常に似ているということ、文化庁の調査官が評価しました。今まで鎌倉期というふうに考えられていた仏像が12世紀だというふうに考えられてくるように、経塚とかあるいは仏像の見直し等を含めて研究されていくことと思います。北上川流域に、平泉文化の影響、直接の文化の影響を受けた遺跡が点在している可能性が非常に高くなって、平泉文化の広がりというもの、これからの課題ではあるのですが、もう少し広い広がりを持った、さらに豊かなものであったのではないかと考えられます。

〈佐藤〉 ありがとうございます。発掘からさらに仏像等も含めたお話をいただいて、平泉文化の広がりというものここ10年で、また分かってきたというようなお話をいただきました。続きまして杉本先生からお話いただければと思うのですが、10年と限らず、20年、30年でも構わないんですが、発掘成果で特に印象に残ってることを一つ、そしてもう一つ質問にも1点お答えいただきたいですけれども、「発掘調査などの成果の中で、平泉の庭園は京都の浄土庭園を導入したと言われておりますが、庭園の流派には、作庭記流と仁和寺流があった旨の記述を目にしました。仁和寺流真言宗系の庭園の

特徴について、また京都での実例があれば教えていただきたい」というようなご質問をいただきましたので、合わせてお願いできればと思います。

〈杉本〉 まずここ30年間ぐらいの平泉を見ていて、それはやっぱり柳之御所が見つかったときの、インパクトが大きかったです。私がちょうど来た時も発掘調査をしておられて、発掘をしている柳之御所を案内していただきました。保存問題も非常にホットなもので、すごくよく覚えています。それと自分の興味も含めて考えると、やっぱり無量光院の調査がすごく進んだというのが、30年間の中の思い出深いものです。それは「悉く宇治の平等院を模す」と書かれている実態がはっきりしていったわけです。当時の平泉の考え方は、京都と似ていることをポジティブにとらえて、そこにフォーカスしながら平泉を評価してゆく、という平泉文化のとらえ方だったと思うんですけども、実は無量光院を調査していくと、ここも似てる、あそこも似てると私も言いましたけど、実は似てないところの方が多くて、似てるところを探すと、こういうところがあるね、という話なんです。ポイントは、似てはいるんだけど全体で見るとどこまで似てるのかが実はよくわからない、ということなんです。これは、平泉の選択が働いて、そういう形になっているということです。ということは、無量光院の調査の中で明らかになってくるものは、何をもって「宇治の平等院を悉く模す」と言わせるのか、という平泉の主体性というものなんです。そういう部分が非常に明確になってきたなと思っています。だから、今は京都と似ていることをポジティブにとらえるよりも、どの部分が実は京都から来ていないかという平泉の主体的な選択をとらえるところにフォーカスするように変わってきたところがあると思っています。私個人からすれば、無量光院の実態が分かってきたということは非常に大きなことだと思っています。

当時の作庭がどのような形で行われたかというのは、仁和寺流とか何とか流というのは、ちょっと私はあまりよく知りませんが、それはもう少し後の時代の流派のことだと思います。実は平安時代の中で、作庭実務者の実像はほぼ見えませんが、誰が作ったかは分かります。大体こういったものは、名前が先に出てくる。大体あの建物系の人達の、いわゆる大工の棟梁の名前の方が先に出てくることが多いかと思いますが、作庭者が名前を出してくるというのは大体中世以降であります。平安時代ですと、橘俊綱が『作庭記』というものを書いていて、あたかも彼の書いたことが広く、当時の中で一般的に作庭者として、流派的なものとして語られることがありますが、それ自体もよく分かりません。実は平安時代の作庭者がどのような形で、どのようなことをしていたのかという実像は、これから、平安時代の状況のよい庭園遺跡を具体的に調査していく中でしか、おそらく明らかにならないのかなと思っています。そういう意味で、実は平泉の庭園調査というのはとても有意義だと思います。残念ながら京都の中で、平安時代の庭園を大きな面積で発掘するということは、平等院もほぼもう無理でして、やっぱり部分的な発掘しかできないとか、平安京内の例えば法勝寺も、法成寺も小さなトレンチでの、池の片隅を捕まえている程度のことで、どのような景観を当時作り上げていたかというその技術的な部分は分かりません。これから、そういうことに向かっただけいかなきゃいけないのかなと思っています。

〈佐藤〉 ありがとうございます。作庭については、まだまだ課題が掘らなければわからない部分が多い、というようなお話をいただいたのかなと思います。続きまして吉田敏先生にお願いしたいと思います。やはり同じように、ここ10年20年30年で、発掘成果で特に印象に残られていることが一つと、あとご質問をいただいております、「藤原氏の初代、2代、3代と発展してくるわけですけども、その全体としての都市計画のようなものをどう考えたらいいか」というようなご質問ですので、それも含めてお願いできればと思います。

〈吉田 謙〉 まずこの20年30年の調査の印象ということで、最初にざっくりお話しさせていただきますけれども、私の関心からいうと、やはり藤原氏の実態というのが、本当に積み重ねで分かってきたというのが、やはり大きいのかなと思います。私も文献史学の端くれなんですけど、どうしてもこの文献史料に描かれてるもので、すべて分かった気になってしまうんですけども、やはり実物どおりで、実態が見えてくると、先ほどのかわらけですとか、堀ですとか、あとは志羅山あたり、毛越寺の前の区画割りの町割りの様子なんかは、ああいうのはもうまさに文献史料では分からない部分だったわけですので、研究上大きかったのかなというふうに感じています。

あと、ご質問いただいた都市計画についてですが、杉本先生もご講演の中で、「都市計画と計画都市では違う」というお話で、私も全く同じことを感じておりました、つまりランドデザインを出して作る都市と、それから個別に計画を積み重ねながら最終的に大きくスプロールのようになっていくという、ざっくり言えば二通りあるのかなと考えます。もちろん何となくできたというのものもあるんじゃないかと密かに思っていますが、おおよそ為政者たるもの、何となく、というのはないという前提に立てば、そういうことなのかなと思います。そうすると、平泉の場合どう捉えるかということなのかなと思います。先ほどは初代、2代、3代にかけて、だんだん広がって、あるいは計画的に作られてくると紹介しましたが、最初の柳之御所と中尊寺の間を道で結んでいることは大体調査上分かってきておるようですが、あれもある意味、道路自体を計画的に通してるんだという前提に立てば、それなりの計画的な造形物、おそらく道路の両側に何らかの施設が、あるいは家来たちが住んでいる可能性もあるでしょうし、そういうことを考えると、あれもミニマムな意味では計画都市ともいえると思います。ただ、先ほどから言っているように、つまり完成形があるのかなのかということもありますし、ランドデザインをもって行なうかどうかという点が、一つ見分けるところかなというふうに考えております。段階に応じて見方、評価も変わるんだろうなと思っております。

〈佐藤〉 ありがとうございます。平泉の都市を考える上ではいろんな見方が必要だというふうなお話をいただいたということかなと思います。続きまして渡辺先生でございます。やはり修学旅行で来られていると、平泉をずっとご覧いただいた方かと思いますが、特に印象に残られている発掘調査などをご紹介いただくとともに、もう一つ、ご質問いただいております、「平泉の発掘で中国陶磁器などが出ていたり、陶磁器以外にも色々中国の文化というのは見受けられてるわけでございますけれども、これは直接入ってきていたのか、京都などを經由して入ってきていたのか」というご質問でございますので、あわせてお願いできればと思います。



〈渡辺〉 質問の部分、ちょうど僕が言いたかったことと重なります。ここ30年の平泉の研究の進展と平行に、中国史もここ20年ぐらいの間で非常に大きく変化を迎えます。それまで中国の王朝、中国の歴史というと、例えば絢爛たる貴族文化の唐王朝とか、あとは最後の清朝とか中国を一つの王朝として、単体として考えることが多かったんですが、この20年ぐらいの間に、9～13世紀の研究は、ただ中国にとどまるのではなくて、ユーラシア東方とか東部ユーラシアという言い方で、ある種中国を相対化する形で、今日お話をしたような遼とか金といったものの研究が深まりました。その中の一つのジャンルとして、海域アジア史という分野が大きく進展したのもこの時代の特徴だと思います。



この30年の大きな研究、発掘成果という点で、私自身が色々読ませていただいたり、見せていただく中で、中国史なので、見ていて、へえと思うのは、輸入磁器、または磁器のかけらがかなり出てきています。浙江省の杭州の近くの龍泉というところの龍泉窯のものだと思いますが、今日の岩手大学の学長の岩渕明先生のごあいさつにもありましたが、岩手大学でその磁器の成分分析ということをして、それがどこから出てるのかということの研究した本が、ちょうど今年出版されております。今日も来られておられます藪敏裕先生を中心とする、岩手大学平泉文化研究センター監修の『貿易陶磁器と東アジアの物流と平泉、博多、中国』という研究書で、いろんな角度から研究なされています。僕がすごく面白かったのは、やっぱり文理融合といいますか、岩手大学で文系と理系の力を結集して研究をされたということです。

先ほどの質問の磁器がどこから来たかということ、それは博多を経由してきているわけです。博多から平泉にきてるということが、そのルートの解明などもすでにこうした研究でされていて、他にも銅銭も発掘で出てきておりますので、磁器が出てきたり、その銅銭が出てきたり、中国のものが海をつたって、この平泉に来ている。加えて磁器の効果についても、それを例えば、柳之御所のお座敷に飾って、どうだすごいだろう、という形で見ながら、そしてかわらけでお酒を飲んだわけです。そこに宴会儀礼が発生する。つまり君主が中心となって、臣下がお酒を飲んだりする中で、君臣関係の、いわば秩序というものがそこできちんと編成される。こうした一つのものを通じて、世界が形づくられていくというのが分かると思います。それが近年の発掘の中で、中国産のものが出てるとというのは、僕自身非常に関心があるので、これがまたどういう形で、もっと出てくるのかなというのは、白磁、青磁、そして銅銭、そういった中国産のものが出ている点は非常に興味があるので、これからも見ていきたいと思います。

〈佐藤〉 ありがとうございます。やはり平泉、及び周辺域も含めまして発掘を日々続けておられて、そして成果が色々な形で分かって積み上げられてきているというようなことをお話いただいたなと思います。

## 【テーマ2 世界遺産による新たな平泉の発見】

〈佐藤〉 それでは続いてテーマ2の方にいきたいというふうに思っております。テーマ2というのは「世界遺産による新たな平泉の発見」というテーマでございます。午前中に田辺先生の方からもお話をいただいたところでございますが、2011年、平成23年に平泉の世界遺産登録が実現したというところでございます。簡単に少しだけ経過を私の方から紹介させていただきたいと思います。付属資料に簡単な年表をあげさせていただいておまして、世界遺産の関係等、柳之御所遺跡との関係を対比して見るができるように書いているところでございますけれども、「世界遺産登録に向けた取組」というところで、まさに柳之御所遺跡が「平泉館」にあたるという、そして保存するというような辺りが決まった頃から、世界遺産登録に向けた取組が始まったというのがご覧いただけるかと思います。今世紀、21世紀に入りまして、平泉の文化遺産が世界遺産の暫定リストに登録されたというところでございます。世界遺産の正式名称は「平泉－仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群－」というふうに日本語では言ってるんですが、岩手県内ではそういう長い本文をほとんどの方はあまりご存知ないと思います。一般には、この「平泉の文化遺産」というようなことで、通っているところでございます。その後、2007年、専門機関「イコモス」が現地調査をして、登録に備えたのですが、2008年、第32回世界遺産委員会では登録延期という決定がされました。そこで再チャレンジということで、もう一度推薦書を出し直して、またイコモスの現地調査を受けて、2011年に登録が決定した

というところでございます。なお今後も取組を続けるというところで、また再び暫定リストに登載されて、今その取組を進めているというところでございます。

前置きが長くなってしまったのですが、世界遺産の取組が、そのような形でほぼ20年続けられてきて、その間、いろんな各学問分野の先生方からアシストをいただいていたというところでございます。例えば今回、パネリストとしてお出でいただいている3人の先生方にも、このフォーラムという場のみならず、世界遺産に関わる会議、専門家としての会議にもご参加いただいたところございまして、その中でテーマ2としましては、世界遺産の動きとともに、その気付かされた平泉、あるいは発見された平泉、というようなものにつきまして、それぞれの専門のお立場からお話いただけるといいかなというふうに思っております。最初に吉田先生よろしいでしょうか。それでこれもまた質問をいただいています。「藤原氏は、宗教儀式の際、貴族的であったかどうか」というご質問と、それから「院政と平泉の開始というのが、ほぼ同じなんだけれども、そうした社会背景、あるいは相関というものをどう考えたらいいか」というような二つの点を含めまして、日本史、日本都市史のお立場からお話しいただければと思います。

〈吉田〉 世界遺産との絡みということを先に感じているところをお話させていただいた後に、ご質問等も答えたいと思いますけれども、世界遺産をそれ以前とそれ以後、どう変わったかということですが、基本的には変わらないでは思っておるんですが、ただある種の段階差はあったかなというふうに思っております。研究の幅がやはりかなり大きくなったといえますか、どうしてもそれ以前は、全国に目を配るとか、あるいは中国、場合によっては北方の世界、あるいは西南諸島等の関係でどうかという視点が一つ潮流としてあったかなと思います。その成果というのは大変実り多かつたし、それをベースにしているからこそ今日があるんだというふうに思っておるんですが、世界遺産っていうものをちょっと意識し始めた段階で、今度はもうちょっとワールドワイドになってきたと言えると思います。例えば、私でしたら都市を考えるにしても、東アジア、あるいはひょっとしたら欧米との都市の比較、あるいは植民地のそういったものをちょっと意識するようになったりして参りましたし、そういう意味でもかなり視野が本当に広がって、それに合わせて研究に携わる皆さんも本当に多士済々になっています。先ほどの渡辺先生の話がありましたけれども、本当に遼・金、それからあとは理系の知識も活用させていただいて科学分析にまで及んでくるわけです。そういった意味では、大変私も勉強させていただきましたし、研究状況としてはかなり格段に上がってるんじゃないかなというふうに感じております。

その上で質問2点いただいております。藤原氏の最初は宗教儀式の際に貴族的か、ということなんですが、これがなかなかちょっと例によってよく分からないところです。文献資料だと、例えば千僧供養と言いまして千人のお坊さんを供養したり、あるいは中国に物を送って、供養させたり、あるいは中尊寺に、お坊さんの僧房ですね、住宅が300、毛越寺に500ぐらい、合わせて800。だから、千人近いお坊さんがそこにいた可能性があるわけです。そのお坊さんたちがただ何となく暮らしていたとは思えないので、事あるごと、仏教行事のときに一肌脱いでもらってたはずなんじゃないかなと思われれます。そういった意味では、都で行なっているような宗教儀礼、仏事なんかも似たようなものを行っている可能性はあるかなと思います。『吾妻鏡』以降の資料でも何々会という齋会、法会をやっている資料がありますのでそういうものはしてるのか、など。ただ、これももう斉藤利男さんたち、菅野成寛さんも言ってらっしゃる通りで、全く都と同じものを持ってきてるかと言われると、大分やっぱり違って、先ほどの密教系のものがないとか、塔がないとか色々指摘いただいております通りで、都の貴族がやってる、あるいは院が、上皇がやってる儀式と同じものをそのままやってないという側

面もあるので、その辺をどう評価するかというのが、一つあるかと思っております。

二つ目のご質問が、院政期と平泉のスタートがほぼ同時だということで、これも私などよりも、これこそ大石直正先生、入間田先生あたりにご解説いただいた方がいいのかなと思うんですけども、これもちょっといろんな考え方があるかと思えます。いろんなタイミングがあって、ご存知の通り前九年、後三年合戦というのを経てくるわけです。今までですと、どちらかという初代清衡が源義家を体よく都に追い返して、陸奥、東北地方の最終的な勝利者として治めたんだというイメージが強いかなと思うんですが、やはり20年、30年の研究で、そう単純でもなさそうで、貴族の日記だと、清衡が何やら悪だくみをしているから気をつけなきゃいけない、という記事なんかもあったり、そうすると必ずしも清衡ひとり勝ちというわけでもないし、上皇、院政とべったりくっついてたかどうか。その辺りももう少し検討していく必要があるのかなとは思っております。ただ私個人の考え方ですが、もちろんやはり偶然に見えても、意外と因果関係があるのが、歴史の面白さなので、たまたま一緒にスタートをしてるには多分それなりのコネクションがあったのかなと思っており、清衡は平泉から一歩も出てないのか、清衡自身が京都に行ってるかどうかは別にして、使者が行っても不思議はないわけですし、文献史料にも出て参りますので、そういう意味では完全孤立して、ここに閉じこもっているわけではないでしょうから、我々が考えてるようなものではない、何かルートを持っていて、それが上手くマッチして、平泉の歴史に繋がったんじゃないかなと、無責任に考えてるんですけども、その辺は諸先生方にご議論いただきたいなというふうに思います。

〈佐藤〉 ありがとうございます。続きまして鎌田さんをお願いしたいんですが、やはり平泉世界遺産への歩みの中では、従来以上に平泉の仏教というものが強調されて評価されたと思いますけれども、先ほどテーマ1と少し関連するかもしれませんが、それから発掘で、柳之御所でもいろんな仏教関係の資料とか出ていて、そうしたものと、先ほどいただいた吉田先生には文献の立場から主にお話いただいたんですが、ここは考古学の立場から、仏教儀式、宗教儀式というんでしょうか。そういったあたりで少しお話いただければなというふうに思います。

〈鎌田〉 柳之御所遺跡の中の仏教的な遺構とか遺物、あるいはそういうものの関連するものということなんですが、一つには火舎、鉄でできた火を燃やす器ですが、火舎と花瓶（けびょう）、花瓶のことなんですが、仏具としては「けびょう」と言います。火舎と花瓶は高さが20cm、30cmぐらいある大きなものなんですが、柳之御所の穴の中から一括して出てきたという事例がありまして、これは私もかなり考えてみたんですが、なかなか難しい。柳之御所内部だけで、あるいは堀内部地区の中だけで考えるのは非常に難しいのではないかというふうに感じています。位置的に言いますと無量光院がちょうど一直線上に見える場所でもありますし、この柳之御所遺跡と無量光院との関係の中で、こういう仏具的なものが穴に埋められて出土していたというようなことなんだろうなというふうには解釈しています。その目的というのが一体何なのかというのは、難しいところだと思います。この輪宝というもので銅の円形の板に「楸（けつ）」という真ん中に打ち込んだものがありまして、これも地鎮遺構というふうに言われてるんですが、その近くには大きな建物が柳之御所遺跡内にはないこと。一体何に対する地鎮なのかというふうに考えてみますと、これもやはり無量光院との関係であると思われる。実は無量光院の張り出し部分があるんですが、そこに柳之御所側には大きな柱を立てた遺構が三本見つかってまして、三本分と一つに直接結びつくような遺構がありました。これもやはり柳之御所遺跡では、内部だけで説明できない。無量光院との関係の中で説明できるということで、柳之御所遺跡内では、ここに仏像があるとかそういうことではなくて、やはり無量光院との一体性というのが強く意識されていた場所、遺跡だろうというふうに思います。いずれ柳之御所遺跡の中で言いますと、

宴が頻繁に行われた遺跡ではあるのですが、同時に、常に綺麗でいようと、清浄な空間でいよとした意識がかなり見受けられます。例えば井戸状遺構、井戸遺構というのが、堀内部地区で最新の総括報告書では70基くらいある。堀内部だけで3mから4mの深さの井戸が70基もある。これは頻繁に井戸を作り変えている。しかも使い終わったものはどんどん埋めてしまう。その埋める過程の中で、宴会で使われた瓦だけを捨てているというようなことで、やはりこの宴会で生じた穢れを井戸の中に封じ込めるといような意識があって、そういうのも一つの当時の柳之御所に住んでいた人々の精神のあり方を示してるんじゃないかなという気がします。堀も一方では軍事目的、武士の居館としてふさわしい立派な堀ではあるんですが、もう一つの見方としては、この空間の中に穢れを入れない。そういう外部と、この内部を隔てるこの清浄な空間でいよとするような意識がこの中にあるのではないかということで、柳之御所遺跡の内部だけではなくて、平泉遺跡群全体でもそういう遺構が幾つかあると思いますので、そういう祭祀的な、あるいは呪的なものを再検討してみると、平泉の都市のあり方というか、街のあり方というのが見直されてくるのではないかというふうな気がします。

〈佐藤〉 ありがとうございます。ただいまお話を伺いますと、堀内部は浄土みたいな綺麗、清浄浄土、清浄な意味での浄土というように感じにもお聞きしました。続きまして、世界遺産はやはり日本の中だけではなくて、世界の視点から評価されなければならないということで、特にアジアの中でどう見られているかというふうな辺りについても、今までも色々あったんだと思うんですが、世界遺産とともに、発展してきた部分の一つなのかなあと思うんです。渡辺先生の方からお話いただきたいと思います。また、一つ質問も来てますので、実はこの質問は杉本さんの方にいただいているんですけども、渡辺先生の視点から、「なぜ平泉は塔の文化を受け入れていないのか」ということについて、渡辺先生は白塔、慶州の白塔のご紹介もしていただいたんですが、そういった辺りも含めて、少しお話いただければなというふうに思います。

〈渡辺〉 世界遺産になってからというか、その前後あたりでの大きな変化といいますと、やっぱり決まったことによって起爆剤になっただろうと、すなわち研究領域が多分拡大したということと、それと併せて研究が進化したということ。具体的には、例えば、いわゆる劉海宇先生がされるような仏教の仏典に関する研究や、そして藪先生やこちらの佐藤さんと劉先生もされたような園池に関する研究。そして横におられる吉田さんがされたようなアジアの中での「都市としての平泉」といった形で、研究領域が大きく拡大したというのは、やはり2011年がきっかけだったんだろうと思います。その一つの到達点といいますか、一つの成果が2013年に汲古書院から出た藪先生編の『平泉文化の国際性と地域』です。これは実は別な大型のプロジェクトいわゆる「寧波プロジェクト」と呼ばれるものの成果ではあるわけですが、タイミング的にそれまでの成果が大きくまとめられたという意味では、アジア史の中の平泉という点で、エポックメイキングになるのだと思います。研究領域の大きな拡大、そして、これまであったものについてもう一度掘り下げてみるという、研究の深化というのは、世界遺産にこの平泉が登録されたことによって、新たに学術的に大きく変化したことだと思います。

その唐の文化っていう体制、日本の人のある種の憧れとしての唐の文化とあるわけですけども、この時代はもうすでに唐は滅んでるわけですので、どちらかっていうとよく言われるのはその後の呉越です。中国の南の方の、呉越の文化なんか受け入れてる。ですから唐風というか…

〈佐藤〉 すいません。タワーの方の「塔」です。

〈渡辺〉 なぜ「塔」の文化を受け入れていないか、そっちですか。すいません。そっちは僕は分かりません。平泉がなぜ塔の文化を受け入れてないか、それはちょっと…。今日、白塔を紹介しましたが、遼王朝が支配した地域では、今日の白塔は目立ったものとして紹介しましたが、じゃあなぜ

平泉に「塔」はないのかというところ、宗派の問題にもかかわってくるんじゃないかと思うので、これは別な方に答えていただいた方がいいと思います。

〈佐藤〉 ありがとうございます。それでは杉本先生からお話いただきたいのですが、実はもう一つ、平泉というのは京都よりも宗教勢力の影響が少ないような印象がある。特に密教の影響が少ない印象があるというようなこともございます。それから、もうすでにお話いただいたところでございますけれども、平等院と無量光院、あるいは平泉との違いというような辺りも、少し含めていただきまして、世界遺産と平泉、そして杉本先生はご紹介ありましたように、もうすでに1994年に京都、宇治が世界遺産になってございまして、世界遺産にも携わられていられています。そういったことも含めて、少しお話いただければというふうに思います。

〈杉本〉 何を話そうかなと思って今ずっと考えてたんですが、実は平泉が世界遺産を目指していく中で、平泉の世界遺産の目指し方というか、そもそもその構成資産がそうなんですけれども、景観にウエイトを置きながら進んでいったというのが一つの大きな特色だと思っています。この背景にあるのは、構成資産の中に浄土庭園があって、毛越寺もそうですし、無量光院もそうですし、大池もそうなんですけど、要は極楽浄土の姿を景観的に再現していった伽藍というものがあるわけです。そういうものを取り扱うということは、通常の遺跡を取り扱うのと大分違うということなんです。通常の遺跡を取り扱っていく場合、我々は発掘調査した遺跡を平面図として二次元的に理解をして、これがこうなってる、ああなってる、というようなことで大体物事を考えていくんですが、実は浄土庭園を取り扱う場合というのは、もう完全に立体的に考えないとだめということです。平面的に考えるのではなく、やっぱりその場所の中で、その遺跡がどのような立体景観構造の中にあるか、どんな景観的雰囲気の中にあるかということがとても重要なんです。平泉は、実はそこに大きく注目しながらやってきている、ということがあると思います。それは単に浄土庭園だけにとどまらず、この都市そのものがいわば仏国土を表わしているということですから、平泉の自然景観の中に宗教、すなわち仏教思想を景観仮託していくわけです。自然景観の中に、その思いを仮託していくわけです。そういうことも含めてそれは全部立体的に見ていく、現在の景観の中でそれを感じ取っていくとか、見ていくという作業になっていくわけです。これが大きいことだと実は思っています。学術面からちょっと離れますけれども、結局、立体的に見るということは、過去の景観というのは分からないので、現在の景観で見ていくわけですね。ということは、結局、歴史というものを現在に引きつけてくる動きにもなっています。すなわち浄土庭園のような景観を構成要素とする遺跡を見ていくということ、それはそのまま現在の景観って、じゃあどうなの？と我々に問いかけてくる。いい景観なのかどうなのかも含めて、我々に突きつけてしまうようなことなんです。平泉を見ていて思うのは、浄土庭園とか浄土の景観から始まっていて、現在の我々が住んでいる景観そのもののよさとか、それをいかに継承させていこうかということ、計画としては景観計画として立てられているわけだけれども、我々の生活の中にやっぱり引きつけて来る、その景観をとらえたことによって、現在のまちづくりの具体的な姿に結びついていったところ、私は平泉の場合は非常に大きいかなと思っています。なかなか他にないんじゃないですかね。ちょうどいいことと言ったら語弊がありますが、文化財保護法が改正されて、文化的景観というものが新しい文化財のカテゴリーになったときに、骨寺が日本で2番目だったと思いますけど、重要文化的景観地区に選定されています。そういう大きな動きも、平泉が世界遺産を目指していく時に、平泉にあった構成資産のそのものが、その景観に着目しながら、やっぱり動いていくものであったので、ああいう本寺の重要文化的景観にもきちっと波及をしていったというような広がりを持ったんだろうと思っています。それが実は私が見ている平泉のことの一つです。

ご質問なんですが、平泉に宗教勢力が少ないかどうか分かりませんが、密教色が少ないというのは以前からいろんな先生方がおっしゃられてるし、私もそもそも毛越寺、無量光院を法勝寺とか、平等院と比べた時にも全然違うなというふうに思っています。平等院にもかつてたくさんの密教堂がありました。五大堂も愛染堂も不動堂もあります。塔もあるんですけど、塔の中に安置されているのは、密教関係の諸仏というようなことで、大体密教色が強いんです。だから密教色が平泉の諸堂、お堂の中にないからといって宗教勢力が弱いのかといたらそういうことではなくて、私も宗教思想を専門にしているのではないので分かりませんが、一般的に貴族の宗教に対する考え方は、「現世安穩、後世善処」で「現世安穩」を密教でやって、「後世善処」を浄土教でやる、という感じなんだと思います。ということは平泉は、「後世善処」がとても大きくなっているということで、「現世安穩」を何でやったかということだと思います。「後世善処」は顕教の部分が大きく、「現世安穩」まで顕教でやっているのか、違う形になっているのかというのは、ちょっと私には分かりませんが、その辺をこれから色々考えていただけたらいいんじゃないかなと思います。平等院、無量光院の差というところも、実はそもそも平泉が持っている仏教のあり方と京都での仏教のあり方、あり方という表現の仕方なのかもしれませんけど、その部分をもう少しきちんと比較する中で考えていけたらいいのかなというふうには思っています。

〈佐藤〉 ありがとうございます。やはり京都、あるいは宇治と平泉を両方見た場合に、その宗教性、あるいは庭園も含めて平泉と京都の違いというようなものも色々具体的なお話をいただけたらなあとこのように思っているところでございます。今、最後に杉本先生がまだまだ研究すべきところがあるというお話をされましたが、県では「平泉世界遺産」柳之御所のガイダンス施設の建設を現在進めておりまして、ちょうど2年後の令和3年度中にはオープンできると思います。場所は前に柳之御所資料館があった場所でございます。今、道の駅があるところの向かいになるわけですが、そういった新しくできた施設で、今いただいたような課題も続けて検討をできればなというふうに思っているところでございます。それではここからの司会は、菅野先生と変わりたいと思います。

### 【今後の平泉研究への期待】

〈菅野〉 少し今までの論点、先生方からいろんな話いただいたわけですが、ちょっと私なりに整理させていただきますと、今日の最初の田辺先生の基調講演からでもそうですけれども、30年と20年、それから先ほど10年という10年刻みの言葉がしばしば使われました。考えてみると、30年というのは柳之御所遺跡の大規模発掘調査から31年、1988年、昭和63年に始まった調査ですね。あれが非常に大きなインパクトを与えたというのはもう先生方、この会場にいらっしゃる皆さん、よくご存じのことと思います。それからの10年というのは、前半は保存のための、後半は保存が決まってからの様々な動きがありました。それが一段落して今年20周年をむかえるこのフォーラムが始まった。これは世界遺産に向けた、一連の動きでしようが、非常に全国的にも珍しいですね。毎年1回、雑誌を出してフォーラムを開催するというのは。この20年の研究は何だったのか。30年をまとめるというのも大変だし、この20年をまとめるというのも大変ですが、ただその世界遺産にむけた議論のなかで、一つ仏国土という問題が出てきた。それからアジアの中での位置づけという問題が出てきた。この仏国土の問題、あるいは浄土の問題や



アジアの中でという問題意識は、30年前は必ずしも、明確には出てなかった論点なのかなと私は回顧しております。全くの私事ですけど、昭和63年が大規模発掘ですが、私が岩手大学に来たのが昭和61年ですので、何か私自身の30年史を今伺っているような気持ちです。非常に感慨にふけりながら、先生方のお話を伺っております。改めて、今後の平泉研究に対する期待などありましたら、お願いします。今までの繰り返しでも結構です。これが今日における最後の発言の機会だと思って、思いのたけを語ってください。

〈杉本〉 本当に平泉は世界遺産に取り組むことによって、深い研究、広い研究が可能になった分だけ、結局、課題はたくさん出てきたというか、分からない部分がたくさん析出されてきている、というまだ過程の中にいるんだなということがあります。これからいろんな研究をされていく中で、解明もされていくんだろうと思っています。

それとは全然違う視点で平泉の、今後というんですかね、学術研究から少し外れるかもしれませんが、思いを述べさせていただきますと、私もかなり昔に「古都京都の文化財」で世界遺産に少し関わらせていただきました。あの頃は結構楽しんで、今みたいな大変な感じで世界遺産になるわけじゃなくて、文化庁さんから「次は宇治も世界遺産になるからね、準備しといてね、お金幾らだよ」と言われて、「はい分かりました」です。お金を予算に盛り込んだというぐらいのことで、意外と昔は簡単だったんですけども、実はそれが今から考えると、あんまりいいことじゃなかったなと思っています。要は世界遺産に何のためになるのかとか、なっってどうするのか、とかという議論はほぼないまま、実は世界遺産になった。宇治は特にでした。平等院と宇治上社が世界遺産になっていくんですけども、議論もないし、研究もないんですよ。要はレポートを書いて、コンサルさんが英語に訳してくれて、みたいな話。そういうことなんです。やっぱり世界遺産に何でなるのか、何でなりたいたいのか、どうするのかという問いはちゃんと持っていないと、取組自体の意味というものが分からなくなるわけです。学術的に進めていくということだけではなくて、それが実際生きている、この土地に生きている皆さんの、何に、どのような形で作用して、利益としてもたらされるのか、ということなのだと思います。私はだから観光ということをお願いしたいわけではなくて、それはある一面にしか過ぎないと思います。平泉を見ていると、平泉の世界遺産の特性は、やっぱり浄土教の世界、今から900年ほど前にこの土地で平泉という都市を造った人たちが、仏教を大きく評価する中で仏の救済を求める。そういう意味合いの都市を造っていったわけです。仏の救済は人間側から見てみれば「現世安穩、後世善処」ということになるんですけども、やっぱりそれは、現代的に言い換えると、「平和に暮らしたい」という言葉に行き着いてゆくと思います。平泉は、実はコンセプトの中に持っているものはそういう精神の部分が含まれているものだろうなと思っています。よく考えてみますと、戦後すぐにユネスコができたときに、ユネスコ憲章の前文というのがありまして、皆さんよくご存知かもしれませんが、なぜ世界遺産なのか、というのはこの前文の中のあるフレーズに非常に大きく依存しておりまして、「戦争は人の心に起きるものだから、人の心に平和の砦を築かなければならない」という言葉があるわけです。要は世界の人たちがお互いに分かり合うことで、これからの戦争を回避していく。全人類が平和に生きていけるということを希求したわけですね。そういうことで考えてみると、平泉の世界遺産というのは、そことすごくよく響き合うことができる。コンセプトの中にあるだろうなと思っています。それは、どんどん言っていかなきゃいけないんじゃないですかね。世界の宗教都市とか、たくさんあると思いますが、そういう都市も自分たちが平和に生きていくということを中心にしながら、宗教施設を造っているわけですね、やっぱりそういうところを、表に出していくということはとても実は重要なことだと思います。当時の平泉の実態は学術的に調査研究していくということ

になると思いますけれども、そういう発信というものが、もう世界遺産になってるわけですから、必要なかなと思っています。比べてみると京都はあんまり発信してないんですね。世界遺産の発信は低調です。何かそういう問いがないというのはちょっと寂しいかと、そういうことを少し期待をしながら、背景になっている部分を学術的に深くいろんな方が今後も続けていただければいいなと思っています。

〈吉田〉 続いて私も簡単にコメントだけさせていただきたいと思いますが、やはり、20年30年スパンでやって参りましたが、一番思うのは、月並みですけど、継続は力だなということです。我が身に引きかえても、例えば20年、これを毎年この会をやって、作り、発行し、ということを考えてだけでも、ちょっと私の細身であと3年が限界かなと思うわけですけども、そういう意味では本当に頭の下がる思いです。そういう形でだからこそ、本当に多種多様なジャンルの研究が積み重なって、新しい課題もどんどん出来てくる。さっきの塔の話じゃありませんけども、初代清衡が中尊寺を造る時に、ご承知の通り一基の塔を関山に建てたというところから、そもそもスタートするわけですが、そのあと、その塔がどう作られてどうなっていったのか、よく分からない。ああいうメンタリティー、宗教面、彼にとってどういう仏教像があったのか、あるいは、そばにどういってお坊さんたちがブレンとしていたのか、という辺りが大変問題になってくるでしょうし、今までももちろん議論を重ねられてきてるわけですから、そういう意味でもまだまだ課題がいっぱいあるかなと思っています。私の町割り絡みに引き付けると、やはり毛越寺から東に伸びる、碁盤目状に近い町割のあたりも、調査次数は随分なさってて、報告書も分厚いのが出ていたりいたしますけども、そういう成果も大量にありますので、これからはまたそういうのを少し見直すのも一つの手かなというふうには感じております。

今までこの文化フォーラムを20年やって参りましたが、ちょっと感じてるところを申し上げると、私みたいな者が、山形くんだりからやってきて、あることないこと20分ぐらいしゃべって、山形に帰れば私はそれで済むんですけども、ちょっともったいないなと思います。いつも来て思うのは地元の、調査、発掘調査なり、研究に携わってる皆さんが、なんかもっと伸び伸びと発言できる環境、あるいは雰囲気、伸び伸びされてる方もいっぱいいますけども、例えばこういう考古学的なデータを取り交ぜると、こういう像が描けそうです、というような発信しやすい雰囲気というのも一つあると、もうちょっと盛り上がってくるのかなあという気がいたします。もし、今後そういう何か大きな研究所を作っても、今更箱物になってしまうでしょうけれど、何かそのようなもっと伸び伸び自由に発言いただけるような環境、雰囲気作りがあると一皮むけてくるんじゃないかなと思います。あまりこれ以上言うと、お前が全部やれと言われそうなので、これで終わらせていただきます。

〈渡辺〉 僕はこれまで言ってきたことの繰り返しなんですけど、簡潔にちょっと一点だけ述べますが、これまでのこの平泉研究というものの中で、今日の杉本先生、また吉田先生のお話の中にもありましたけども、例えば他のところと比べた時にここは似てるっていう部分は確かにある。ところが、実はここは似ていない。やっぱりここは全然違うという部分もやっぱりいっぱいあるわけです。つまり、同質性と異質性というものが、だんだんやればやるほど明確になってくる。とりあえずそのアジアの中の平泉といった中で比較をしようと思った時に、何か同じような要素を探そうと思ってやっていったわけで、ここの部分は似ているんじゃないかということ、探したと言えば探した。でも、やっぱり向こうは違うな、ということも分かってきました。とりあえずその種をまきました。風呂敷はとりあえず広げるだけ広げてみましたということは言える。ただ、そうするとどこかでその風呂敷を閉じなきゃいけない。一つにまとめるっていう作業が、どこが同じで、どこが異なるのか、その中から抽出



される、今日の午前中の質問の方にもありましたが、ある意味の日本の特質、またはその平泉の特質というものが、抽出されていくのではないかなと思います。それを閉じる作業は今やるべきなのか、もうちょっと先にやるべきなのか分かりませんが、広げっ放しはよくないので、どこかでまとめることもしなきゃいけないなと思いました。

〈北村〉 私は、主に発掘調査を担当するものとして、きちんとしたデータを採り、成果を上げられる発掘調査を行うよう心がけております。そして、研究者の方々をはじめ、利用される方に使って頂けるようなデータを提示していきたいと考えています。

それと、大きなテーマとしてずっと思っていることなのですが、今後を担っていくのは子供たちだ、と考えています。そのためには、遺跡を訪れてくれる子供たちを大切にしたい、興味を持ってもらえるようにしたいと思っています。そして、10年20年もしくは30年と、遺跡を守っていく人たちに育ててほしい、という思いがありますので、地域の子供たちに是非とも発掘調査を行っているところを見たり、体験したりしていただきたいと思っています。そうすれば、世界遺産になっても、遺跡を守っていく人たちが延々と繋がっていきますので、大切な郷土の遺産を受け継いでいけるよう次の世代に引き継いでいけるよう心がけたいと思います。

〈鎌田〉 先ほど菅野先生が、平泉には塔はないけども、経塚がある、という話を聞いて、私も「そうだ」という感じに強く思っていたところです。平泉周辺には幾つか経塚があるんですが、とりわけこの中心にある金鶏山経塚、本格的な発掘調査はやられてなくて、盗掘に近い形で、遺物は現在、東京国立博物館と奈良国立博物館に行ってます。内容はよく分からないんですが、私、27年ぐらい前に東京国立博物館に行ってちょっと見せて欲しい、いやいや倉庫の底の方にあると言われて、でも強くお願いして見せてもらったんですが、もう相当な常滑や渥美の壺がたくさんあって、その中で渥美の「袈裟たすき」だけが展示されていると、奈良の方には経筒があるということで、やはり金鶏山というのは、規模も何も違う、北上川流域のセンター的な経塚なんだなあという思いをあの時したわけでありまして。同時に北上川流域にはたくさんの経筒があって奥州藤原氏の思い、平泉文化を広げていくという中で、やはり経塚の果たした役割というのは、単なるお経を56億7000万年後に伝えるというだけではなくて、この北上川流域を、平和な清浄な空間にしていこうというような、意識や願いが働いたんだらうと。それを人々が受け入れていったんだらうなというようなことなんだらうと思います。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の手帳の中に、「経埋むるべき山」ということで花巻周辺の山々に、経を埋めるように、というふうに、お父さんに託したというような話もありますが、やはり単なるお経を埋めただけじゃなくて、この地を平和な場所にしたいという思いが込められてるんだというふうに思いました。いずれ平泉の仏教文化ということを考える上で、私が思ってるのは、やはり9世紀、胆沢城、志波城ができたあたりに、仏教が本格的な形で入ってきて、この地で独自の発展を遂げていくということで、国見山廃寺とか白山廃寺とか、たくさんのお寺跡が残っていますし、仏像も残っている。こういう仏教文化の発展の過程の中で、成果の形として、集大成として、平泉文化、仏教文化があるんだなということを裏付けていきたい。これは自分自身がやっていきたいというふうに考えていることですし、かつて藤島亥治郎さんだけでなく、司東真雄さんという方がいらっしゃって、そういう研究をなさっているのだから、そういう成果をさらに発展させるような研究が必要なのかなというふうに思っています。あと、その中で思うのはやっぱり十一面観音と毘沙門天の信仰が非常にこの地方では強い。仏像が残っているということで、こういう信仰のあり方というのが12世紀になって、どういうふうになっていったのか、受け入れる側の方のことも考えていったらどうなのかなというふうに思っています。あと私、文化財愛護協会の機関誌の「岩手文化財」という雑誌の表紙に、平泉関係の出土

品の紹介をやってたんですが、内耳鉄鍋（ないじてつなべ）とか、あるいは火舎・花瓶とか人面墨書土器とか、呪符（じゅふ）とか色々書いたんですが、色々調べていくと全くよくわからないんですね。先行研究がほとんどない。ということはやはり、一つ一つの資料の個別の研究がまだ十分になされてないのではないかと。それぞれやっていると、全国各地の交流とか物の交流とか、工人の動きとか、使っている人たちの思いというのが分かってくるということで、今後、都市平泉とか、アジアとの関わりという大きな話だけではなくて、出土したそれぞれの資料の個別研究を深めていくということ、これは自分自身もやっていきたいと思ってますし、こういう研究というのを深めていったらいいんじゃないかなというふうに思います。

〈菅野〉 どうもありがとうございました。進行の不手際で、まとまりを欠いたかもしれませんが、それぞれの方々から有益なお話をいただけたと思います。それでは、ディスカッションの結びということで、本日、基調講演いただいた田辺先生にご感想をいただきたいと思います。



〈田辺〉 皆さん、どうもお疲れ様でございました。それから、壇上の先生方、大変ご苦勞様でございました。ずっと、お伺いしてまして、大変勉強になりました。

充実した発表と講演とパネルディスカッションと、ありがとうございました。30年にわたる柳之御所遺跡をはじめとする調査によって得られた成果が、研究の膨らみや広がりをもたらしたということをご皆さん、異口同音におっしゃっておられました。そして世界遺産になることによって、さらにその研究の範囲や、領域、ジャンルが広がった。考古学とか歴史だけではなくて、理科学系にまで広がったことなども。その中で3人の先生方からは、いくつかの具体的なテーマの、例示をしていただきました。30分ぐらいの話でしたから、もっとたくさん話したいことがあったんだろうと思いますけども、計画都市ではないけども、都市計画はきちっとあったんだとか、それがまた段階的に造られていた話とかですね。それから、これは都市論を随分やってきてたんですけども、古代から中世に移ると中世型都市の先駆、それは日本的な都市への展開じゃないか、みたいなお話とかですね。それから、境界型の都市という見方もそうですね。面白いですね。そういった具体的なテーマのお話もございました。それから、逆にテーマも広がりじゃなくて、個別の研究も不足しているんじゃないかという話もあって、これからの文化フォーラムが、ますます新しい展開を見せて、ぜひ研究面では発展していただきたいという印象を強く私は持ちました。平泉の特色について、皆さんが異口同音に仰っていたのは、これまでは単純に京都と比較してどうのこうのということだったけども、平泉の独自性が見え始めてきたのではないかとということです。そのあたりは、今後、平泉を発信していく上で、ものすごく重要な内容だと思います。研究面でのこれからのフォーラムというのは、大変期待の大きいものがありますので、3年でも続けるのが大変なのに、というお話もありましたけども、ぜひ装いを新たにして、次の21回以降に向かっていていただいたらありがたいなという感想を持ちました。



最後に、何人かの方が仰ってましたけども、むし

ろこれから発信ということになったら、要するに専門の枠を超えていかないといけないだろうと私も思っていて、一般の市民をどういうふうに巻き込んでいくのか、あるいは一般の市民の方に平泉をどういうふうに支えていただくのか。午前中の話もその辺、強調したつもりだったんですけど。それから、子供たちにどうするか、いう話がありました。多分これはこのフォーラムの役目ではないかもしれませんがね。そんなことへの期待も持ちながら、皆さんのお話を伺っております。どうも、ありがとうございました。

〈菅野〉 どうもありがとうございます。それでは短時間ではありましたが、有益な討論ができたというふうに思います。これでパネルディスカッションを終了ということにさせていただきます。どうもありがとうございました。